

シリーズ人間環境学講義：10年後の持続可能性に向かって

20240222 飯嶋秀治

2024年度はいくつかのサイクルが少しずつずれながら重なった年になる。1972年、当時のコンピューター・シミュレーションから、エコノミーによる消費がエコロジーによる回復力を上回っており『成長の限界』を迎えつつあるとの指摘から半世紀になる。1999年、人間環境学研究科が九州大学に発足してから25周年になる。振り返ってみた時、半世紀前のこの指摘に対して、私たち人間環境学の学問はどこまで寄与できて来ているであろうか。

グローバルには生物の種的多様性は減少しており、逆に世界的な人口増加は止まっていない。エネルギーの総消費量も増加していて、地球温暖化の減速化は心もとないままである。またナショナルには人口は減少し、労働面での福祉は脆弱になり、多様化と断片化する労働力は、ジェンダーギャップ指数や児童虐待通告件数等と関連しながら同時進行をしているようにさえ見える。

私たちの人間環境学は、こうした中で営まれてきているし、これからもその趨勢はしばらく変化しそうにない。そうした未来が来そうな予感である。であれば、そうした趨勢の中で何を知り、何を行う必要があるであろうか。今回のシリーズ人間環境学講義ではこうした課題を「持続可能性」という主題の下で主題として学んでみることにする。これまでの人間環境では「持続可能」ではないが、逆に「持続可能」にするには何をどうする学問すればよいであろうか。

世話人：

- (1) 4月10日オリエンテーションと自己紹介：飯嶋秀治(人間共生システム)
- (2) 4月17日発達凸凹とコミュニケーション：實藤和佳子(行動システム)
- (3) 4月24日障害を抱えた家族社会：山下亜紀子(人間共生システム)
- (4) 5月1日労働市場の多様化：竹熊尚夫(教育システム)
- (5) 5月15日脱炭素・エネルギー問題：尾崎明仁(空間システム)
- (6) 5月22日WS1 学び方を変える／自ら調べる：→フィールドワーク・実験科目へ
- (7) 5月29日過疎化するコミュニティ：志賀勉(空間システム)
- (8) 6月5日地域をどう学ぶか／文化にフォーカスするか：岡幸江(教育システム)
- (9) 6月12日災害とその研究：神野達夫(都市共生デザイン)
- (10) 6月19日回復と支援：野村れいか(実践臨床心理学)
- (11) 6月26日WS2 学び方を変える／自らデザインする：→コロキウム紹介
- (12) 7月3日ダイアログとデザイン：田北雅裕(教育システム)
- (13) 7月10日多様な選択肢を探求し、支援する：内田若希(行動システム)
- (14) 7月17日みんなで考え具体化する：鶴崎直樹(都市共生デザイン)
- (15) 7月24日WS3 もしくは人間環境学コロキウム

目下のところ、決定しているのは以上の講師である。学生たちは初日から学際チームに生まれ、半期の間 Slack で普段の情報も共有する。

授業はそれぞれの講師の方に 30 分講義を行って頂き、次に 20 分程講師の方と飯嶋が「持続可能性」の主題に引き付けるように対談をし、最後に 20 分程学生たちの学際チームでその回の主題についてディスカッションを行う。最後の 10 分程は毎回コメント（というか次回のための忘備録）をつけてもらう。

なお、九州大学の「シリーズ人間環境学講義」だけで問題を解く手がかりが全て手に入るわけではないのは言うまでもあるまい。だからこそ私たちには九州大学外から知見を求められる「人間環境学コロキウム」の機会が与えられている。また、それでも分からない場合には「萌芽的学際助成」で、自らフィールドワークでも実験室でも研究すればよい。講義の中からそうした学びへと進んでいけるように、途中「学び方を変える」という主題で、3 度のワークショップを挟み、①他人から知見を求めるには誰からどのように求めればいいのか、②自ら研究する際には何を考慮することになるのか、③みんなで問題を解くにはどのように取り組めばいいのか、を学べるように工夫したい。

最終回に、2023 年度の委員による人間環境学コロキウムを開催予定。